



阿佛尼公の墓石と、高さ八尺の石碑（寶歴七年四月建立）

第三号 平成28年6月1日 阿仏尼公の石塔

『十六夜日記（いざよいにっき）』を著した阿仏尼（あぶつに）（安嘉門院四条（あんかもんいんしじょう））は、藤原定家の子為家の後室で、歌人としても知られる。

為家の死後、長子である先妻の子為氏と、わが子為相（ためすけ）（冷泉家祖）との間に、播磨国細川庄の相続権をめぐる争いが起き、阿仏尼は幕府へ提訴するために、鎌倉へ下向することを決意する。阿仏尼六十歳の頃、京の栗田口から東海道を下る旅がはじまった。

阿仏尼は、行く先々の風景や地名などを歌に詠みながら、14日間の旅日記をつづった。それが日記文学・紀行文学として名高い『十六夜日記』である。

阿仏尼は、弘安6年（1283）4月に鎌倉で没したとされ、その墓は鎌倉市の英勝寺の近くにある。しかし、京都の大通寺（だいつうじ）（南区大宮通九条下る）にも阿仏尼の墓と伝わる小五輪石塔があって、その由来は大通寺蔵版『阿佛尼と大通寺』（小川壽一著）に詳しく書かれている。『拾遺都名所圖絵（しゅういみやこめいしよずえ）』阿佛墳（あぶつのか）の割注に「六孫王大通寺の外乾の方、森の中にあり」とあるのもその中の資料のひとつである。

大通寺（通常は非公開）はもと、六孫王 神社（ろくそんのう）（京都市南区壬生通八条角）の北にあった源氏ゆかりの遍照心院大通寺であるが、東海道本線の敷地用地となったために、明治45年（1912）に現在地へ移転してきた。

つまり、かつて阿仏尼公の石塔のあった場所は、今はその上を電車が走っている。

NPO法人京都観光文化を考える会・都草

理事長 坂本 孝志